

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

静岡県駿東郡小山町

○学校名

小山町立小山中学校

○学校のURL

oyama-jhs@fuji-oyama.jp

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年3学級 【特別支援学級】2学級 【合計】11学級

○児童生徒数

【全生徒数】273人（平成24年11月30日現在）
（内訳：1年生77人、2年生93人、3年生103人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

学校教育目標 「志を持ち、学び合い、認め合う」生徒の育成
重点目標 「誇り高き小山中」生徒の育成 ※キーワード：「誇り」
研究主題 自分のよさを知り、仲間とともに伸びようとする生徒の育成
～関わり合い認め合う活動を通して、誇らしい自己と共感的な人間関係を育てる～

○人権教育にかかる取組の全体概要

○3つの育成部で人権教育の視点を取り入れた指導を工夫し、「目指す生徒の姿」に迫ることによって、研究主題の具現化を目指す。

「確かな学力育成部」 各教科 道徳

目指す姿…『自分の思いを伝えたいと願う生徒』『共に理解し合い、高め合っていく生徒』

- ・授業中に生徒が意見を語り合い、聴き合い、時には活発に議論する場面を設定する。
- ・生徒の思いを引き出し、関わり合いや認め合いにつなげる仕掛けや発問を工夫する。

「豊かな感性育成部」 特別活動 総合的な学習の時間

目指す姿…『互いの意見交換の中で、他者を認め、自分自身も成長していく生徒』

- ・3つの誇り「あいさつ」「部活動」「合唱」を継承、深化させ、発信する。
- ・縦割りカラー活動でリーダーを中心に積極的に関わり合い、伝え合う力を養う。
- ・人権の知識と人権感覚を身に付ける学級活動の授業を行う。（参加体験型人権学習）

「健やかな心身育成部」 生徒指導 地域・家庭・近隣学校との連携

目指す姿…『心を込めたあいさつと清掃ができる生徒』

- ・生徒理解を深めるため、日常的な声かけと教育相談を実施する。
- ・小山中学校区4校が連携したあいさつ運動で、あいさつの輪を広げる。

○体験的な学習によって、人権の知的理解を進め、人権感覚を高める。

「参加体験型人権学習の実践」

「生徒が人権を意識し、身近に感じる生活環境づくり」

3. 特色ある実践事例の内容

◆ 『生徒主体の学び合いを生み出し、一人一人を大切にする授業をつくる』

(1) 授業づくりプロジェクトチームによる組織的な授業づくり

- ・異なる教科担当でチームを組み、研究授業の単元構想や本時の展開を、多様な角度から分析・検討し、協同して授業づくりを進める。

(2) 生徒主体の学び合いの授業を全教職員で共有

- ・関わり合い認め合う学習活動を取り入れた学び合いの授業について、全教科で共有するポイントを定める。日常の授業で、それを意識しながら、生徒一人一人の思考過程を大切にする授業をつくる。



〈生徒が身を乗り出して話し合う学び合いの授業を目指す〉



(3) 学習指導案の見直しと工夫

- ・単元構想をもとに、「本時の目標」において、付けたい力を明確にする。また、これまであいまいになりがちであった「授業に臨む生徒の思いや学力の実態」と「授業終末の変容した姿」を、できる限り具体的に表現する。
- ・授業構想や授業過程に、教師の「見取り」から予想される生徒の思考や発言を具体的に記述する。また、関わり合い認め合う学習の姿を単なる手だてとして記すのではなく、生徒のつぶやきや発言などの具体的な姿で示す。

(4) 「考えて聴き合う」態度の育成

- ・話し手に体と目を向けて、自分の意見との共通点や相違点を意識して聴き、反応（うなずく、つぶやく、ハンドサイン等）して返す。
- ・話し手は、自分の思いが聴き手に伝わるように「どうですか？」等の「つなぐ言葉」を用いて話す。相互に伝え合い、理解を深める。



(5) 道徳授業の見直しと改善

- ・資料分析、ねらいとする価値につながる導入や発問の工夫、板書や教材の工夫など、「一人一人の思いを大切にすること」を念頭に道徳の授業改善を進める。

◆ 『誇りを自信にして、自他を尊重できる居心地のよい学校をつくる』

(1) 3つの誇り「あいさつ」「合唱」「部活動」の理想を生徒会活動で具現化する

- ・縦割りカラー活動で、合唱を高め合う。(カラー合唱コンクール〈写真①〉)
- ・東北の被災地に思いを込めた合唱を届ける。(東北応援プロジェクト)
- ・地域にあいさつの輪を広げる。(あいさつ標語づくり、4校合同あいさつ運動)
- ・伝え合う活動を通して、リーダーの育成を図る。(リーダー研修会)

(2) 思いを伝え合う話し合い活動の推進

- ・縦割りカラーや専門委員会など、学年を越えた集団で活発に討論し合う。
〈写真②〉
- ・仲間の頑張りを認め合い、励まし合う場を設ける。(生徒会だより「通信柱」、部活動激励会、カラー別団結式、ミッション市訪問交流会、駅伝部壮行会・報告会など)

①



②



(3) 生徒の心を開き、理解を深めるための実践

- ・教育相談活動の充実を図る。(生活ステップアップアンケート、教育相談週間)
- ・小中連携による授業参観や情報交換を行う。生徒の様子や支援の状況などを協議し、相互に理解を深める。(4校交流研修会、小6夏の部活動体験、中1授業公開、中3母校訪問、地域ボランティアなど)
- ・町の支援員や養護教諭が寄り添い、相談しやすい雰囲気づくりに努める。
- ・生徒支援会議やケース会議等で情報の共有や支援の見直しを図る。

◆ 『体験的な学習によって、人権の知的理解を進め、人権感覚を高める』

(1) 参加体験型人権学習の実践

①

- ・「高齢者」「女性」「同和問題」などのテーマ別に教材を選定し、学級活動の授業で全学級が計画的に実施する。

〈写真① インターネット掲示板の匿名性を疑似体験によって学ぶ〉



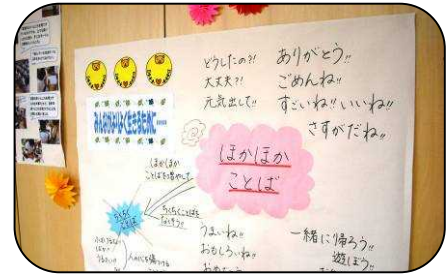
②



・校内研修でワークショップ型授業等の実習を行い、参加体験型人権学習のねらいやファシリテーターの役割について理解を深める。
 <写真② 校内研修 ワークショップ実習>

(2) 生徒が人権を意識し、身近に感じる生活環境づくり

- ・生徒会活動で「人権週間」を設け、専門委員会等での取組などを通して、人権を大切にする意識を全校に広める。
- ・掲示物で、「ほかほか言葉」を奨励したり、一人一人のよさを認め合うコメントを寄せたりする。
- ・「DV防止セミナー」「人権・キャリア教育講演会」など、外部講師を招いて、人権をテーマにした講演会を実施する。

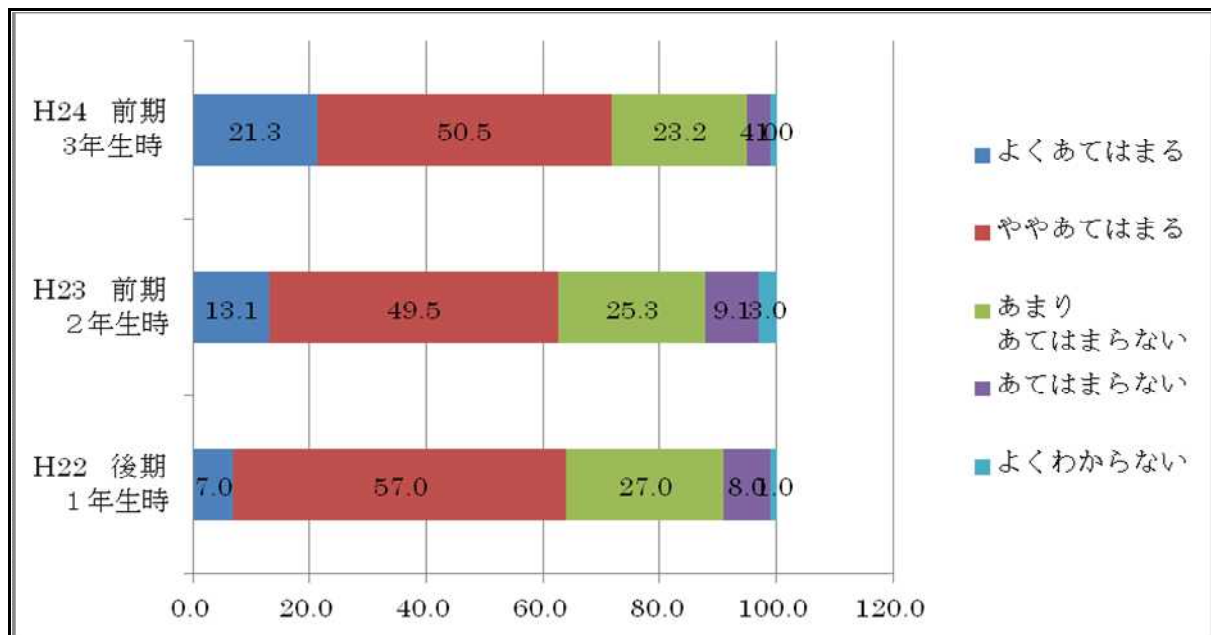


4. 実践事例の実績、実施による効果

学校評価生徒用アンケートの回答結果(平成24年度3年生を対象とした3か年の調査)

「授業中、積極的に仲間と関わり、自分の考えを表現することができたか」

単位は %	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	よく分からない
H24 3年生前期	21.3	50.5	23.2	4.0	1.0
H23 2年生前期	13.1	49.5	25.3	9.1	3.0
H22 1年生後期	7.0	57.0	27.0	8.0	1.0



平成23・24年度、授業を中心に、関わり合い認め合う活動を多く取り入れてきたことによって、生徒の意識が変容したことが分かる。「よく当てはまる」と答えた

生徒が3倍に増加し、「やや当てはまる」まで合わせた肯定的な回答も、平成24年度には70%を超えるなど「積極的に仲間と関わり、自己表現できるようになった」と実感している生徒が確実に増えている。そして、そのような意識の変化は、自他を尊重し、仲間の存在を共感的に受け止めようとする態度や行動となって表れるようになった。

〈実践の成果〉

◆ 授業を中心とした様々な関わり合いを通して、共感的な人間関係が深まり、生徒が「伝え合う楽しさ」と「認め合う喜び」を感じるようになった

「関わり合い認め合う授業が、学ぶ楽しさを向上させている」

- ・話合いや小集団活動が活発に行われるようになり、生徒が「授業が楽しい」「やりがいがある」と強く感じるようになった。
- ・「授業が分かった」「伝え合えると楽しい」「もっと聴きたい」といった多様な思いがふくらみ、生徒が学ぶことに対して期待感や自信を感じる場面が増えた。

「落ち着いた態度や行動が仲間との親和を生み出している」

- ・常に落ち着いて、冷静に行動しようとする。周囲に気を配り、穏やかに振る舞う。
- ・仲間を信じて、迅速でまとまりのある集団行動をとることができる。

「授業・行事・部活動などの場にいつも笑顔がある」

- ・授業中や行事、休み時間などいろいろな場で、笑顔を浮かべた仲間の輪ができる。

「素直に受け止め、分かり合おうとする人間関係がある」

- ・いろいろな考え方があることを認め、話合いの中で互いに思いを伝え合える。
- ・学年や男女の境なく語り合ったり、笑い合ったりする中で、全校が力を合わせ、感動を共有することに価値があるという意識が、生徒全体に浸透している。

◆ 仲間と共に高め合ってきた「誇り」によって自他を尊重する心が育ってきた

「話を真剣に聴く姿勢」

- ・友達の発言や教師の説明に対して、いつも真剣な目で、集中して聴こうとする。

「『誇り』の継承の第一歩」

- ・「誇れる仲間、学校でありたい」という思いで、3年生が学校をリードしてきた。「誇り」を大切にして、高め合っていこうとする気運が学校全体にみなぎっている。



「『誇り』が『恥の文化』を育みつつある」

- ・生徒の「誇り」の一つである「あいさつ」は、学校を訪れたお客様や地域の方々から、多くのお褒めの言葉をいただいている。生徒は「小山中生徒として恥ずかしくない態度で堂々と行動したい」という意識が高い。さらに生徒の作文や言葉からは、人を気持ちよくさせる言動を心がけたいという声が多く寄せられる。人を不快にさせ、傷つける「いじめは恥だ」といえる集団になってきた。

「教師が生徒一人一人のよさを丁寧に見取り、授業づくりに生かしている」



・授業中はもちろん、日常生活のあらゆる場面で見取った生徒のよさを日々の授業に生かそうとする教師の意識が向上した。また生徒の興味や関心を引き出し、意欲を生み出すためにはどうしたらよいかを常に考え、導入の仕掛けや発問をさらに工夫するようになった。

◆ 人権尊重の視点に立つことによって教師の意識が変わり、研修の質が向上した
「生徒のために自己を磨き、高め合う教師の輪が広がっている」

- ・校内では、静岡県総合教育センター東部支援班の人権教育支援研修や校内授業研究会で、授業づくりに対する研修を精力的に進めてきた。プロジェクトチームが、指導案検討や授業後の研究協議を行う。その成果や課題は、翌日の「校長だより」「研究通信」によって返され、その後の授業づくりにつなげられる。このようなPDC Aサイクルに基づいた研修体制によって、教師もまた、常に成長している。
- ・小山中学校区4校交流研修に加えて、町内の「中中連携事業計画」によって、研修の輪が更に広がっている。町教委の指導主事や授業アドバイザーに橋渡しをしていただくことで、他校の研修や授業研究がとても身近になった。地域が一体となって子どもたちを育てていく体制が着実に整いつつある。



〈中中連携合同研修会で授業案を検討〉

5. 実践事例についての評価

〈研究発表会参加者の感想より〉

- ・「人権教育って何？ それを授業に、とはどういうことだ？」というのが最初に思ったことです。「一人一人を大切にする授業」、今日参観させていただいた授業がまさにそれでした。授業の中に人権は多くあり、少しの意識でそれを大切にできることが分かりました。
- ・人間として生きていくために、どう生きていったらよいか。当たり前を増やしていき、ほんわかとした人間関係をつくっていくことは、すべての学校生活が円滑にいくようになるということですね。（国語分科会参加者）
- ・教師がじっくりと生徒からのやる気を引き出し、待つ姿勢に感心しました。生徒が、一つのをみんなでつくりあげていくことで、互いを認め合っていたのが印象的でした。
- ・生徒の実態や地域の様子を鑑みながらの研究テーマであり、「誇り」という言葉をキーワードとしての学校教育が、よく具現化されていたと思います。（学級活動分科会参加者）
- ・教師が生徒一人一人への言葉遣いに配慮したり、生徒が小グループを作る際に自

然と仲間に声かけをしたりと、人を大切に作る姿がよく見られました。生徒が二年前よりも堂々と発言をしていて、成長を感じました。（英語分科会参加者）

〈取組についての評価〉

本校が目指す人権教育が、関わり合い認め合いながら成長してきた生徒の姿で研究会参加者に理解され、評価されたことが何よりの成果である。生徒が身を乗り出して授業を受けている姿、認め合う声や笑顔が常にある教室など、人権感覚豊かな生徒の育成は確実に進んでおり、それは保護者や地域住民からも好意的に受け止められている。また、人権教育の視点で多様な角度から教育活動を見直し、組織的に推進していくことの重要性を本校教職員が強く自覚したことも大きい。

〈今後の目指す方向〉

- ◆ 人権教育の視点に立った取組によって、全ての生徒が学ぶ喜びを味わい、一人一人に確かな学力が定着する授業づくりを進めていく

生徒の姿

- ・話し合いや集団活動の場で「学び合い」を深めながら、多様な考えを認め合ったり様々な手だてを提案し合ったりして、課題を深く追究している。

教師の姿

- ・「生徒を見取る力」「教材研究・単元構想の力」「生徒の思考をくみ取る力」を自己研鑽し、校内研修によって、人権尊重の視点のもとで生徒の学力向上につながる授業をつくる。

- ◆ 自他共にかげがえのない存在と思える、人権感覚豊かな学校をつくる

生徒の姿

- ・小山中の「誇り」を、自分たちにとって意味のあるものとして、継承していく。
- ・他者と理解し合い、よりよい関係をつくる「豊かな言葉」を身に付けていく。

教師の姿

- ・体験を通して、人権を尊重する言葉や行動のすばらしさを学べるように工夫する。
- ・自分や仲間を大切に思える環境づくりに努める。生徒の前で「誇り」を熱く語り、人権感覚を磨く姿勢を教師自らが示す。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

小山町立小山中学校

キーワードを「誇り」と定め、学校を中心に家庭、地域、関係機関と共有を図りながら、明確な目標設定とそれに対応した取組が着実に行われ、効果を上げている事例である。

目指す方向を①すべての生徒が学ぶ喜びを味わい、一人一人に確実な学力が定着する授業づくりを進める②自他共にかげがえのない存在であることを大切に思える人権感覚豊かな学校をつくと定め、指導の重点を明確化し、PDCAサイクルを踏まえた実践を重ね、目指す生徒の姿に迫ることにより研究主題の具現化を図っている。

「誇り」を大切にしていこうとする気運が学校全体にみなぎり、「恥ずかしくない態度で堂々と行動したい」、「人を不快にさせ傷つけるいじめは恥だ」といえる集団に育ち、「誇り」が「恥の文化」を育みつつある。このことは、仲間と共に高め合ってきた「誇り」によって自他を尊重する心が育ってきた証であり、示唆に富む内容である。